月夜

与謝野晶子

お幸(かう)の家は石津村(いしづむら)で一番の旧家でそして昔は大地主であつた為(た)めに、明治の維新後に百姓が名字(みやうじ)を拵(こしら)へる時にも、沢山の田と云(い)ふ意味で太田(おほた)と附(つ)けたと云はれて居ました。それだのに祖父の時に自身が社長をして居た晒木綿(さらしもめん)の会社の破綻(はたん)から一時に三分の二以上の財産を失ひ、それから続いてその祖父が亡くなり、代つて家長になつたお幸の父はまだやつと二十歳(はたち)になつたばかりの青年であつた為(た)め、番頭の悪手段にかゝつて財産を殆(ほとん)ど総(すべ)て他へ奪はれてしまつたのでした。喜(き)一郎(らう)と云つた其(その)お幸の父も、お幸とお幸より三つ歳下(としした)の長男の久吉(ひさきち)がまだ幼少な時に肺病に罹(かか)つて二年

余りも煩(わづら)つて歿(な)くなりました。其時分にもう太田の家は石津川の向ひの稲荷(いなり)の森の横の今の所へ移つて来て居ました。自家に所有権のあつた其沢山の田に取巻かれた三本松(ぼんまつ)の丘の家は、今では村の晒問屋(さらしどんや)の山仁(やまに)の別荘になつて居ることもお幸兄第にはお伽噺(とぎばなし)の中の一つの事実くらゐにしか思はれないのでした。お幸は強い性質の子でした。丘の三本松は好(い)い形であると眺(なが)めることはあつても、感情的な弱い涙をそれに注がうとはしませんでした。この春高等小学校を卒業してからお幸は母が少しばかりの田畑を作ることゝ手仕事で自分達(たち)を養つて居るのを心苦しく思ひまして、自身の

友であつた中村（なかむら）おつると云ふ人の親の家へ通ひ女中になつて行つて居ました。中村の家も亦晒問屋（またさらしどんや）でした。お幸が中村家の手伝ひをするやうになつてからもう五月程になるのですがこの最近の四五日程苦しい思ひをさせられたことはありませんでした。お幸に親切な心を持つて居たおつるが九月の新学期から大阪の某女学校へ入る事になつて其地の親戚の家へ行つてしまつたことはお幸の為（た）めに少なからぬ打撃と云はねばなりません。中村家には意地の悪い女中が二人居ました。お幸が通ひで夜遅くなつてからの用をしないのが二人には不平でならないことだつたのでせうが、おつるの居

る間は目に見える程の迫害はしませんでした。中村家のお内儀（かみ）さんは病身でしたから台所のことなどは二人の女中が切つて廻（まは）して居るのでした。お幸のしなければならない用事が無暗（むやみ）に殖えて来て自然お内儀（かみ）さんの部屋へ行くことが少くなると、其処（そこ）へはまた外の用をどつさりお幸に押し附けた女中の一人が行つて、お嬢様が見ていらつしやらないと思つて用事を疎（おろそ）かにすると云ふやうな告口（つげぐち）がされて居ました。家（うち）へ帰つて家（うち）の用事をする人に夜分の食事はさせないでもいゝと云ふやうな無茶な理屈を拵へて、下男と下女が一緒に食べる夜の食卓にお幸の席を作つてやらないやうなこと

を二人の女中は仕初めました。家(うち)へ帰つて更に食事をすると云ふことは母親に済まないことのやうにお幸は思はれるものですから、昼の食事を少し余計目に食べて我慢をしようとすればまた二人の意地悪女はそれも口穢(くちぎたな)く罵(ののし)りました。今日で丁度(ちやうど)五日の間お幸は日に二食で過ごして来ました。

お幸は中村家の裏口を出てほつと息を吐(つ)きました。

「何か別のことを考へなくては。」

お幸は思はず独言(ひとりごと)をしました。其処には轡虫(くつわむし)が沢山啼(な)いて居ました。前側は黒く続いた中村家の納屋で、あの向うが屋根より高く穂を上げた黍(きび)の畑(はた)になつて居

ます。お幸は黍がこんなに大きくなつてからはつひ人かと思ふことが多くて、歩き馴(な)れた道も無気味でした。中村家の母家の陰になつて居た月は河原へ出ると目の醒(さ)めるやうな光をお幸に浴びせかけました。水も砂原もきら〳〵と銀色に光つて居ました。川下の方に村の真実(ほんたう)の橋はあつて、お幸の今渡つて行くのは中村家の人と、此処(ここ)へ出入する者の為(た)めに懸けられてある細い細い板橋です。鳴り出した西念寺(さいねんじ)の十時の鐘の第一音に弾(はじ)き出されるやうにお幸は橋を渡つてしまひました。一町程行くと右に文珠様(もんじゆさま)の堂があります。お堂は白い壁の塀(へい)で囲まれて居ます。白壁には名灸(めいきう)やら堺(さかひ)の街

の呉服屋やら雇人口入所（やとひにんくちいれじょ）の広告やら何時（いつ）でも貼（は）られて居るのです。

「おや、こんなものがある、」

お幸はその中に新しい貼紙（はりがみ）の一つあるのを見出（みいだ）したのです。それは大津（おほつ）の郵便局で郵便配達見習を募集するものでした。

「学歴は小学校卒業程度の者だつて、十五歳以上の男子つて、まあそんなに小（ちひ）さくてもいゝのかしら、日給は三十五銭。」

お幸はこんなことを口で言ひながら二三分間その貼紙の前で立つて居ました。

「男ぢやないから仕方がない。」

暫(しばら)くの間お幸は前よりも早足ですた〳〵と道を歩いて居ましたがまた何時の間にか足先に力の入らぬ歩きやうをするやうになりました。魔の目のやうな秋の月はお幸のやうな常識に富んだ少女をも空想な頭にせずには置きませんでした。

「馬鹿(ばか)な。」

と思ひ出したやうに云つた後でもお幸の空想は大きく延びるばかりでした。お幸は髪を切つて男装をして大津の郵便局へ雇はれて行かうかとそんなことを思つて居るのです。母さんが承知をしないかも知れない、か

う思ふとお幸の目には、そつと髪を切らうとして居る所へ母親が現て来て、あの小楠公の自殺を諌めたやうなことを、母親が切物を持つた手を抑へながら云ふやうな光景が見えて来ました。そして駄目だと思ひました。

「けれども」

お幸はまた最初の考へに戻つて、大津は此処から云へば三里も隔つて居ない所だけれども、泉南泉北と郡が別れて居て村の人などはめつたに往来しない。何方かと云へば海の仕事をする人と工場の多い大津と云ふ街をこの村の人は異端視して居るのだ。だから私が

其処で男に化けて郵便脚夫をしても誰（だれ）も気の附く人はあるまい。自分の働きで自分の食べて行くのは一緒でも今の女中奉公よりその方がどんなにいいか知れない。お金持の奴隷になる訓練を受けてそれが私の何にならう、私はもう断然と外の仕事に移つてしまふのだ。さうしなければならないのだ。私は工女の境遇がつまらないのであることは知つて居る。それにはなりたくないと思つて居る。郵便脚夫は資本のある人に虐待される女工などゝは違つて、お国の人が一緒になつて暮すのに是非廻さなければならない一つの器械を廻すやうなことをするものなのだ。人間仲間の手助けを立派に

するものなので、男装して男名（をとこな）にして私は早速郵便配達夫の見習ひに行かう。真実（ほんたう）にそれはいいことだとお幸は思ふのでした。

何時の間にかお幸はもう稲荷の森へ入つて来て居ました。虫の声が遠くなつて此処では梟（ふくろふ）が頻（しき）りに啼（な）いて居ます。

「久ちやん。」

お幸はいつものやうに弟へ帰つた合図の声を掛けました。古い戸のがたがたと開けられる音がしました。

「姉さん。」

久吉は草履を突掛けてばたばたと外へ走つて来まし

た。

「姉さんに云ふことがあるよ。」

「どうしたの、母様（かあさん）は。」

お幸の胸は烈（はげ）しく轟（とどろ）きました。

「母さんのことぢやないよ。姉さんに云ふことがあるつて云つてるのぢやないの。」

「ぢやなあに。」

お幸は弟の肩へ手を掛けて優しく云ひました。

「姉さん今日はお芋が焼いてあるよ。」

「そんなこと。」

「だつて姉さんはお腹（なか）が空（す）いて居るのぢやないか、僕（ぼく）

知つてるよ。」
久吉は恨めしさうでした。
「誰(だれ)に聞いたの。」
「中村さんの音作(おとさく)さんに聞いたよ。今夜だつて食べさせないだらうつて。姉さんはもう我慢が出来まいつて。」
「あなた、母さんに話して、そのこと。」
「いいえ。けれどお芋は母さんに云つて焼いたのだからいいよ。」
「さう、ありがたうよ。久ちやん。」
「早く行かう姉さん。」

久吉に袖を引かれた時に、お幸は郵便配達夫になることを此処で弟と相談して見ようと思つて居たことを思ひ出しましたが、其儘なつかしい母の顔のある家の中に入つて行きました。

二人の母親のお近は頼まれ物の筒袖の着物へ綿を入れた所でした。

「唯今、母様、こんな遅くまでよくまあお仕事。」

とお幸は口早に云ひました。

「お帰り。道は淋しかつたらうね。」

「月夜ですもの 提灯は持たないでもいいし。」

久吉が暗い台所から持ち出して来た盆からは餓ゑた

お幸に涙を零させる程の力のある甘い匂ひが立つて居ました。お幸は弟の好意を其儘受けて物も云はずその焼芋を食べてしまひました。久吉はお茶の用意もしてくれました。

「私が作つたものだもの、そんなに甘味しければ毎晩でもお食べよ。」

母親はじつと娘を見ながらからかう云ひました。

「母様がお作りになつたからおいしいのよ。」

「なんの、おまへ自身で作つて御覧、もつとおいしいよ。」

お幸はこの時ふと母の労力を無駄使ひをさせたと云

ふやうな済まない気のすることを覚えました。

「私が持つて行く。」

皮の載つた盆を下げようとする久吉をかう留めてお幸は自身で台所へ行きました。

「母さん、暗くて見えませんけれど、何かして置く用が此処にありませんか。」

お幸はやや大きい声でかう云ひました。

「姉さんは元気が出たね。」

と久吉が云ひました。

「何も用はないよ。」

「母さん、母さん、僕は云つてしまひますよ。姉さん

はね、中村さんで晩の御飯を食べさせて貰はないのだつて、他の女中が意地わるをするのだつて、中村さんの音作がすつかり僕に云つてくれましたよ。母さん、もう姉さんを中村さんへ手伝ひに遣るのをよしなさいよ。」

弟の母に語るのをお幸はじつと台所で聞いて居ました。

「お幸や、さうなのかえ。」

「ええ。」

お幸は目に涙を溜めて灯の下へ出て来ました。お近は袖口をくけかけて居た仕事をずつと向うへ押しやり

ました。

「何故（なぜ）黙つて居ました。 自身の身体（からだ）のことを自身で思はないでどうするお幸。」

「はい。 私（わたし）は外の仕事の見つかるまでと思つて辛抱して居ましたけれど。」

「外の仕事つて。」

「私（わたし）今晩帰り途（みち）で大津の郵便局の郵便脚夫の見習に十五以上の男を募集すると云ふ貼紙（はりがみ）を見ましたから、母さん、 私は男の姿になつて髪なんかも切つて雇はれに行かうかしらと云ふやうなことも考へて来たのです。」

とお幸は思ひ切って云ひました。

「おまへにそんな働きが出来ますか。」

「私（わたし）はよく歩きますし、丈夫ですし。」

「それだけの理由（わけ）で郵便屋さんにならうと言ふの。」

「いゝえ。私（わたし）は世の中の手助けになる仕事ですからして見たいのです。」

「今の仕事は。」

「女中と云ふものが主人の家に大勢居ることは一層お金持を怠惰者（なまけもの）にするだけのもので、世の中の為（た）めにはならないと私（わたし）は気が附きました。さうぢやないでせうか。」

「それはさうかも知れない。」

「私（わたし）は自分の出来ることの中で一番いい仕事をしなければならないと思ひます。」

「十五になると大分理屈が解（わか）るね。」

お近はかう云つて久吉の方を見ました。

「姉さんはえらいや。僕なんかは学校を出たら百姓になるのが一番いいことだと思つて居た。」

と久吉は云ひました。

「お幸は百姓をどう思ふの。」

「まだそれは考へません。」

「それを考へないことがあるものですか。母様（かあさん）が若し

間違つたことをして居たらおまへは注意をしてくれなければならないぢやないの。母様（かあさん）のして居ることは百姓ですよ。私（わたし）は世の中へ迷惑をかけないで暮して行くと云ふことが世の中の為（た）めだと思つて居るよ。自身で食べる物を作つて私は自分やおまへ達の着物を織つて居ます。自分の出来ないものは仕事の賃金に代へて貰つて来ると云ふこの暮しやうが私には先（ま）づ一番間違ひのない暮しやうだと思つて居るよ。」

お近のこの話をお幸は両手を膝（ひざ）の上で組合せてうやうやしく聞いて居ましたが。顔を上げて、

「母さん、田や畑はもう少し余計に貸して貰へるので

すか。」と言ひました。

「小作人が少くて困つて居るのですもの、貸して呉(く)れますとも。」

「髪を切つてお芝居のやうなことをするよりも私(わたし)のすることは、母様(かあさん)、あつたのですよ。」

「何のことですか。」

「野仕事です。百姓です。」

「さうかね。おまへが郵便局へ行きたいと云ふから、私(わたし)は男になつたりなどしないで、局長に逢(あ)つて女の儘(まま)で、採用(つか)つて貰ふことを一生懸命ですればいいと思つて居たよ。私には百姓がいいと云つただけで、おま

へを百姓にしようと思つて居るのぢやないよ。」とお近は言ひました。

「姉さん百姓におなりよ。三人で百姓をすると決めませうよ。」と久吉は云ふのでした。

「私（わたし）は何でも出来ますが百姓でも出来ます。」

「それではなつて見るがいいよ。ねえお幸、今日角造（かくざう）さんに聞くと三本松の家を山仁（やまに）さんはまた堺の商人へ売るさうだよ。私（わたし）はそれがいいと思つて居るよ。おまへ達は知らないがそれはそれは無駄に広い家なんだからね。あれを真実（ほんたう）に人間仲間の役に立てようと思ふなら大勢の使ふものにしなければならないのだからね。

堺へ持つて行つて幾つかの家に分けて拵へたらいいだらうよ。併(しか)し建物に立派な宝物になる価値(ねぶみ)のあるものは別だけれど。」とお近は云ひました。

「さうなつたらあの丘へ自由に上(あが)れますね。いいなあ。」と久吉は云ひました。三人は幸福であることを感じて居ました。

底本：「日本児童文学大系　第六巻」ほるぷ出版
　　１９７８（昭和53）年11月30日初刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月１日２刷発行
底本の親本：「少女の友」実業之日本社
　　１９１８（大正７）年10月
初出：「少女の友」実業之日本社
　　１９１８（大正７）年10月
入力：田中敬三
校正：鈴木厚司
２００６年９月12日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。